

〈原著論文〉

女子大学生における居場所感覚の基底にある 心理学的機軸の探索 (VI)

——日常の心理学的安寧感と SNS (social networking service) 世界における居場所感覚——

An Exploration of Psychological Mechanisms Underlying Ibasyo
Feeling in Female Undergraduates (VI) :
Psychological well-being in everyday life and Ibasyo feelings in SNS
(social networking service) universe

諸井 克英 木ノ下 晴菜*
(Katsuhide MOROI) (Haruna KINOSHITA)

Abstract : The present study explored the relationships among psychological well-being in face-to-face situations and “ibasyo” feeling in SNS (social networking service) universe. The Psychological Well-being Scale (Nishida, 2000 ; Ryff, 1989 ; Ryff & Keys, 1995 ; revised by authors) and “ibasyo” Feeling in SNS Universe Scale (Moroi *et al.*, 2018) were administered to female undergraduates ($N=250$). According to the results of the multiple regression analyses and the covariance structure analysis, self-acceptance in face-to-face situations decreased feelings of solitude and alienation in SNS universe, while autonomy depressed feelings of satisfaction and acceptance in SNS universe. The significance of research in psychological mechanism underlying “ibasyo” feeling in SNS universe was discussed.

Key words : psychological well-being, “ibasyo” feeling, social networking service, covariance structure analysis.

I. 問題

わが国では、インターネットに組み込まれた電子メール中心の流れと別に、諸井 (2004) が指摘したように、「ポケベルから携帯メールへ」という異なる流れがとりわけ若年層を中心に 2000 年を挟んで出現した。メール機能が携帯電話機に装備されたことにより、潜在的な情報伝達力の点で劣位であるはずの「文字コミュニケーション」への不可思議な回帰が生じ、それが従来とは異なる

る幻想的關係性を惹起したのだ。さらに、このように新しいコミュニケーションを可能とした「ニューメディア」による様々な社会病理の惹起という指摘に対して、諸井 (2000) は批判的分析を試みた。つまり、新たに生じた電子空間が現実の対面世界を蝕むのではなく、むしろ最早 2 つの空間に心理的境界が存在せず、両者が融合した世界が出現しているのである。結局のところ、所謂「情報社会の病理」は日常社会の病理の投射であると結論した。その後、携帯電話機とインターネットの流れを一体化したスマートフォンの浸透により電子空間はさらに拡大している。

わが国の通信機器普及の状況に関する総務省の報告に

同志社女子大学生生活科学部人間生活学科特任教授

*人間生活学科 2019 年度卒業生

よると(総務省, 2020; 2019年12年実施), スマートフォンの世帯保有率83.4%, 個人保有率67.6%に達した。さらに, SNS (social networking service) の利用率も69.0%であった。また, その利用目的として, 既存の対人関係の維持(「従来からの知人とのコミュニケーションのため」, 86.9%)が主であったが, 対人関係の拡大(「新たな交流関係を広げるため」, 14.9%)も挙げられていた。このように, スマートフォンは, 対面的な対人関係の補完道具であるとともに, SNS世界という新たな形での対人的つながりを展開する道具である。つまり, 日常的な対人関係を対面世界と非対面世界の重層的展開へと変容させているといえよう。

ところで, 諸井・岸・米澤・永野(2018)は, 以上に述べた, わが国におけるスマートフォンの普及とSNS利用の現状を踏まえ, 非対面世界での居場所感覚を問題にした。その際, 対面世界での心理学的不全(過剰適応傾向, 非現実感傾向)とSNS世界の中で形成された居場所感覚との関連を検討した。単純相関分析や重回帰分析によって, 対面世界での不全がSNS世界に肯定的な居場所感覚をもたらす場合と否定的な感覚を醸成する場合があるというSNS利用の対照的な効果が認められた。

本研究では, 前研究(諸井ら, 2018)に引き続き, SNS世界の中でどのように居場所が形成されているかを明らかにする。その際, 日常の心理的安寧感(well-being)とSNS世界での居場所感覚との関連を実証的に検討する。前研究では, SNS利用が日常生活での心理的不全傾向を解消し, SNS世界に肯定的な居場所感覚を醸成できると仮定して研究を行った。

そもそも, SNSは, 広辞苑(新村出(編), 2018)によれば次のように定義されている。「インターネット上の会員制サービスの一種。友人・知人間のコミュニケーションを円滑にする手段や, 新たな人間関係を構築するための場を提供する。企業や政府機関でも情報発信などに活用される」。この定義は, SNSの肯定的機能のみに触れている。しかしながら, SNSの機能の両側面を認めた諸井ら(2018)による研究だけでなく, この関係については, 以下に述べるように様々な研究で両側面が見出されているのである。

加藤(2013)は, SNS利用の負の側面としてSNS疲れを指摘した。加藤は, SNS疲れを「SNSを利用する中で利用経験に基づいた何らかの否定的感情を抱き, サイト利用を控えたり, 退会したりする経験」と定義し, 男女高校生を対象として半構造化面接を試み, 「現実世界で交流のある者-現実世界で交流のない者」と(受信

者-発信者)という2軸上に, SNS利用に伴う否定的経験を位置づけた。中尾(2017)は, 男女大学生を対象に同様な試みを行い, この2軸の確認を行った。

岡本(2017)は, 以上のようなSNS疲れを含めSNS利用がもたらす不全状態の計量的測定を可能にするために, SNSストレス尺度を開発した。岡本は, 自由記述に基づき, SNSストレスに関する41項目を作成し男女大学生, さらに45項目版をWeb調査を介して18-69歳の男女サンプルに実施した。因子分析(最尤法, プロマックス回転)および確認的因子分析により7因子26項目のSNSストレス尺度を構成した(過剰な繋がり, ギャップ, 閲覧強迫, 情報拡散不安, 背伸び, 申請拒絶, 社会的比較)。中山(2018)は, 高校生を対象とし, 日常の友だち関係に関する設問からクラスター分析に基づき3クラスターを抽出した(関係回避群, 気づかい・群れ群, 内面関係群)。同時に測定した岡本によるSNSストレスとの関係を見ると, 気づかい・群れ群の者は, 閲覧強迫, 情報拡散不安, および社会的比較の点でストレスを抱える傾向があった。つまり, 内面と外面で乖離させながら日常生活での友だち関係の管理をしている者は, SNS世界が重荷となっているのだ。

久保・坂田・清水(2015)は, 男女大学生を対象にSNSの利用実態やSNSへの依存傾向がアイデンティティ確立の状態や孤独感とどのように関係しているかを検討した。交差的時間差相関分析によって, 次のことが見出された。a) 対面生活でも既知である人とのSNSの利用は, アイデンティティ確立に寄与するとともに, SNSでのみのネットワークの拡大ももたらす。b) SNSのみのネットワークの拡大は, アイデンティティの確立に何の影響もおよぼさないし, 対面生活のネットワークの拡大にもつながらない。この研究に従えば, SNS世界が日常世界の延長として位置づけられている時には肯定的な効果を発揮することを示しており, 日常とは別の新規の関係性が必ずしも生起するわけではないことになる。

しかしながら, SNS世界への接近が日常とは別の関係性の構築ができると思われることも事実である。岡村・多根井(2020)は, 大学生・専門学校生を対象に, SNS(Twitter, LINE, Instagram, Facebook)のアカウント取得と自己隠蔽傾向(「否定的もしくは嫌悪的と感じられる個人的な情報を他者から積極的に隠蔽する傾向」)との関係を検討した。TwitterやFacebookのアカウント保有数が多いほど自己隠蔽傾向が高い傾向が見られた。

木村・河合・中嶋・山本・岡(2018)は, Web調査

会社を介して選ばれた高校生を対象に、認知熟慮性（心に最初に浮かんだ反応に抵抗する思考特性）と SNS 利用に関するリスク認知との関係を検討した。認知熟慮性が高い者に次の傾向が認められた。a) 自分が被害に巻き込まれるリスクを低く認知している一方で、他者のリスクを高く認知していた。b) トラブルに巻き込まれた被害者の自己責任度を高く評価した。つまり、本来は日常場面で有用な認知熟慮性が逆に SNS 世界を甘く見る方向に機能するのだ。

対面世界での異性との補完する装置として、SNS は古くから機能する。仲嶺・田中・上條 (2019) は、調査会社を利用して、「SNS で知り合った異性と対面で会った経験がある」男女高校生を対象として SNS での出会いに至る応答過程に関する設問に回答を求めた。林の数量化Ⅲ類とクラスター分析により、双方の類似性の確認（地元、趣味、共通の話題）のやりとりの後に対面的段階に移行していることが明らかになった。興味深いことに関係開始における類似性の機能は、対面世界で古くから認められている。

以上に述べたように、SNS の機能については、広辞苑（新村 出（編）、2018）で定義されているように、単方向なものではない。そこで、本研究では、対立的な 2 つの命題を立てた。

命題 A：対面世界で適応的である者は、SNS 世界に肯定的な居場所感覚を抱くだろう。

命題 B：対面世界で適応的である者は、SNS 世界に否定的な居場所感覚を抱くだろう。

以上の対立する命題を実証的に検討するために、対面世界での心理学的安寧感と SNS における居場所感覚を測定する質問紙を女子大学生に実施した。

II. 方法

1. 調査対象および調査の実施

同志社女子大学での社会心理学関係の講義を利用して、質問紙調査を実施した（2019 年 4 月 18 日、19 日）。回答にあたっては匿名性を保証し、質問紙実施後に本調査の目的と社会心理学における研究上の意義を簡潔に説明した。また、回答の有無や内容が成績とは無関連であり、全体として解析処理することを強調した。青年期の範囲を逸脱している者（25 歳以上）を除き、以下の尺度に完全回答した女子学生 250 名を分析対象とした（2 年生 110 名、3 年生 137 名、4 年生 3 名）。回答者の平均年齢は 19.70 歳（ $SD = .70$, 19～24 歳）であった。

2. 質問紙の構成

質問紙の構成は以下の通りである。回答者の基本属性と SNS の利用状況に関する設問に加え、a) 心理学的安寧感尺度および b) SNS における居場所感覚尺度から構成されている。

(1) 心理学的安寧感尺度

回答者が日常的に抱いている心理学的安寧感を測定するために、西田 (2000) が作成した心理学的 well-being 尺度（なお、本研究では well-being を安寧感とした）を利用した。西田は、Ryff (Ryff, 1989; Ryff & Keys, 1995) が心理学的 well-being の 6 次元に対応して作成した尺度項目を改変した (76 項目)。この尺度を成人女性（平均値 45.1 歳； $SD = 8.70$; 25-63 歳）に実施した。因子分析（主因子法、直交回転）によって、Ryff (1989) にほぼ対応した 6 次元が抽出された（人格的成長、人生における目的、自律性、自己受容、環境制御力、積極的な他者関係）。6 次元それぞれに負荷が高かった ($\geq .40$) 43 項目について、表現を若干修正して心理学的安寧感尺度項目とした（表 2-a, 付表 1 参照）。

回答者にこの 6 ヶ月間の状態や気持ちを想起させ、各項目にあてはまる程度を 4 点尺度で回答させた（「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」）。

(2) SNS の利用状況に関する設問

Facebook, Twitter, LINE や mixi など様々な SNS を回答者が日頃のくらい利用しているかを尋ねた。発信・受信や閲覧などを含めて全体としての利用度を 5 点尺度で回答させた（「4. 一日のうちで頻繁に利用する。」「3. 一日のうち必ず一度は利用する。」「2. 一週間に数回は利用する。」「1. ほとんど SNS を利用しない。」「0. まったく SNS を利用しない。」）。

(3) SNS における居場所感覚尺度

「SNS 利用に対する態度や感情」を測定するために、前研究（諸井ら、2018）で作成された SNS における居場所感覚尺度（60 項目）を利用した。この 6 ヶ月間の SNS 利用時の回答者の様子を思い浮かべさせ、60 項目それぞれがあてはまる程度を 4 点尺度で評定させた（「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」）。なお、先の SNS の利用状況に関する設問で、「0. まったく SNS を利用しない」と答えた者にはこの尺度への回答を求めなかった。

なお、評定順の効果を相殺するために、以上の 2 つの尺度では評定用紙を頁単位（それぞれ、5 頁、6 頁）でランダムに並び替えた。

Ⅲ. 結果

1. SNS の利用状況と回答者の限定

回答者における SNS の利用状況を見ると (表 1), 「4. 一日のうちで頻繁に利用する」者は, 全回答者の 89.2% を占めていた。また, すべての回答者が, SNS を少なくとも 1 週間に 1 度は利用していた。前研究 (諸井ら, 2018) よりも SNS の利用者がさらに増えていることを示し, 全国的動向とも一致する。

2. 各尺度の検討

(1) 分析の手続き

2 尺度それぞれで項目水準での検討を行い, 項目平均値の偏り ($1.5 < m < 3.5$) と標準偏差値 ($SD > .60$) のチェックをし, 不適切な項目を除去した。次に, 残りの項目を対象に因子分析 (最尤法, プロマックス回転 ($k=3$)) をを行い, 初期解での初期共通性をチェックした。

残りの項目を分析対象として, 初期因子固有値 ≥ 1.00 を充たす解をすべて求め, 適切な解を探索した。その

表 1 SNS の利用頻度

0. まったく SNS を利用しない	0
1. ほとんど SNS を利用しない	0
2. 一週間に数回は利用する	1
3. 一日のうち必ず一度は利用する	26
4. 一日のうちで頻繁に利用する	223
$m = 3.89, SD = 0.33$	

m : 平均値; SD : 標準偏差値

際, a) 特定因子への負荷量が十分に大きく (絶対値 $\geq .40$), b) 他因子への負荷が小さい (絶対値 $< .40$) という基準を設定した。各項目が単一の因子にのみ .40 以上の負荷量を示すように項目を削除しながら a) と b) の基準を充たすまで分析を反復した。明確な因子パターンが得られた解を採用した。

次に, 因子分析の結果に基づいて, 各因子への負荷量を基準 (絶対値 $\geq .40$) に項目を選別し, 因子概念に一致した方向に得点が高くなるように得点調整をしたうえで下位尺度項目を構成した。下位尺度ごとに, 1 次元性の確認を行い (項目-全体相関分析, α 係数), 構成項目の平均値を下位尺度得点とした。

(2) 心理的安寧感尺度

項目水準でチェックしたところ, 2 項目が不適切であった ($m > 3.5$: well_a_1; $m < 1.5$: well_b_4; $SD < .60$: well_a_1)。残り 39 項目を対象に因子分析を実施したところ, 初期共通性は適切であり ($\geq .32$), 2~9 因子解が算出可能であった。明確な解釈が可能であった 4 因子解を採用した (表 2-a)。第 II 因子, 第 III 因子, および第 IV 因子は, 西田 (2000) に対応しており, それぞれ「Ⅱ. 人生における目的」, 「Ⅲ. 人格的成長」, および「Ⅳ. 自律性」とした。第 I 因子は, 西田の「環境制御力」(3 項目や「人生における目的」(1 項目) も含まれていたが大半 (6 項目) が「自己受容」項目であった。項目内容を吟味すると現在の自分自身を受け入れていることを表していると解釈できたので, 「Ⅰ. 自己受容」と名づけた。なお, 因子負荷量の正負を見ると, 「Ⅱ. 人生における目的」と「Ⅳ. 自律性」では, 正方

表 2-a 心理的安寧感尺度に関する因子分析 (最尤法, プロマックス回転 ($k=3$)) の結果一回転後負荷量一

当該因子負荷量		当該因子負荷量																							
〔Ⅰ. 自己受容〕		〔Ⅲ. 人格的成長〕																							
well_e_4 私は, 良い面も悪い面も含め, 自分自身のありのままの姿を受け入れることができる。	受 .78	well_a_7 私にとって, 新しいことに挑戦して新たな自分を発見することは楽しい。	成	.83																					
well_a_4 私は, 自分の生き方や性格をそのまま受け入れることができる。	受 .74	well_c_7 私にとって, 自分らしさや個性を伸ばすために新たなことに挑戦することは重要だ。	成	.75																					
well_e_4 私は, 自分自身に対して肯定的だ。	受 .73	well_d_4 私にとって, 新しい経験を積み重ねることが楽しみだ。	成	.73																					
well_b_1 私は, 自分自身を好きである。	受 .70	well_e_5 私の人生は, 学んだり, 変化したり, 成長したりする連続した過程といえる。	成	.45																					
well_d_8 私は, まわりの状況にうまく折り合いをつけながら, 自分らしく生きている。	環 .57	〔Ⅳ. 自律性〕																							
well_b_7 私は, 自分の性格についてよく悩むことがある。	*受 -.53	well_b_6 私は, 自分の生き方を考えるときに, 人の意見に左右されてしまう。	律	.74																					
well_d_7 私は, これまでの人生において成し遂げてきたことに, 満足している。	受 .48	well_e_3 私の考え方は, その時の状況や他の人の意見に左右されがちになる。	律	.68																					
well_a_5 私は, うまく周囲の環境に適応して, 自分を生かすことができる。	環 .42	well_a_3 私は, 何かを決めるとき, 世間からどう見られているかとても気になる。	律	.67																					
well_b_8 私は, 自分の身に降りかかってくる嫌なことを, 自分自身の力でうまく切り抜けることができる。	環 .41	well_a_9 私は, 重要なことを決めるときに, 他の人の判断に頼ってしまう。	律	.62																					
well_d_5 私は, 自分が生きていることの意味を見出せない。	*目 -.41	well_e_3 私は, 自分の行動を決定するときには, 社会的に認められるかどうかをまず考える。	律	.54																					
〔Ⅱ. 人生における目的〕		well_c_9 私は, 何かを判断するとき, 社会的な評価よりも自分の価値観を優先する。	*律	-.42																					
well_a_2 私は, 現在, 目的なしにさきよっている感じがする。	目 .77																								
well_a_8 私の人生にはほとんど目的がなく, 進むべき道も見出せない。	目 .74																								
well_e_6 私は, 自分の将来に夢をもっている。	*目 -.66																								
well_e_2 私がどんな人生を送りたいのかは, 明確だ。	*目 -.60																								
well_b_5 私のやりたいことが本当に何なのか, 見出せない。	目 .60																								
well_e_8 私は, 生きるための目標をいつも持ち続けている。	*目 -.44																								
		<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>I</th> <th>II</th> <th>III</th> <th>IV</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>〔因子相関〕</td> <td>I ***</td> <td>-.31</td> <td>.35</td> <td>-.33</td> </tr> <tr> <td></td> <td>II ***</td> <td>***</td> <td>-.40</td> <td>.37</td> </tr> <tr> <td></td> <td>III</td> <td></td> <td>***</td> <td>-.10</td> </tr> </tbody> </table>					I	II	III	IV	〔因子相関〕	I ***	-.31	.35	-.33		II ***	***	-.40	.37		III		***	-.10
	I	II	III	IV																					
〔因子相関〕	I ***	-.31	.35	-.33																					
	II ***	***	-.40	.37																					
	III		***	-.10																					

$N = 250$

適合度検定: $\chi^2(27) = 451.16, p = .001$

初期因子固有値 > 1.66 ; 初期説明率 55.96%

* 逆転項目

(a): 西田 (2000) との対応: I. 人格的成長, II. 人生における目的, III. 自律性, IV. 自己受容, V. 環境制御力, VI. 積極的な他者関係

3. SNS の利用状況, 日常生活における心理的安寧感, および SNS における居場所感覚との関係

点および SNS における居場所感覚 4 下位尺度得点との間のピアソン相関値を算出した (付表 2-a)。次に, 心理的安寧感 4 得点と居場所感覚 4 得点とのピアソン相関値も求めた (付表 2-b)。

(1) 単純相関分析

まず, SNS の利用状況と心理的安寧感 4 下位尺度得

表 2-c 各尺度における下位尺度得点の検討

	平均値	標準偏差	(a)	(b)	(c)
[日常での心理的安寧感]					
I. 自己受容	2.65 b	0.51	$\alpha = .86$.50~.65	0.09, $p = .001$
II. 人生における目的	2.40 c	0.68	$\alpha = .85$.57~.69	0.07, $p = .001$
III. 人格的成長	3.19 a	0.61	$\alpha = .83$.55~.71	0.12, $p = .001$
IV. 自律性	2.35 c	0.59	$\alpha = .80$.37~.67	0.08, $p = .001$
[反復測定分散分析] $F_{(2,81,700,44)} = 168.38^*, p = .001$					
[SNS における居場所感覚]					
I. 被受容感	2.33 b	0.62	$\alpha = .94$.52~.77	0.05, <i>ns.</i>
II. 心理的充足感	2.43 a	0.63	$\alpha = .94$.49~.76	0.05, <i>ns.</i>
III. 自己疎外感	1.98 c	0.54	$\alpha = .90$.40~.68	0.05, <i>ns.</i>
IV. 自己孤立感	1.81 d	0.71	$\alpha = .86$.67~.74	0.14, $p = .001$
[反復測定分散分析] $F_{(1,86,462,15)} = 74.67^*, p = .001$					

N = 250

* : Greenhouse-Geisser の検定

** : 異なる英文字は有意に異なることを表す ($p < .05$, Bonferroni の方法)

(a) : Cronbach の α 係数値

(b) : 当該項目得点と当該項目を除く合計得点との間のピアソン相関値

(c) : 分布の正規性検定 : Kolmogorv-Smirnov の検定に対する Lilliefors の修正値

表 3 SNS における居場所感覚に日常生活における心理的安寧感がおよぼす影響—重回帰分析 (ステップワイズ法)—

[分析 1]					
[説明変数] I. 自己受容 II. 人生における目的 III. 人格的成長 IV. 自律性					
[従属変数] SNS の利用頻度					
IV. 自律性	$\beta = -.27$ a				
I. 自己受容	$\beta = .16$ b				
	$R^2 = .06$ a				
[分析 2]					
[説明変数] I. 自己受容 II. 人生における目的 III. 人格的成長 IV. 自律性 SNS 利用頻度					
[従属変数] I. 被受容感			[従属変数] III. 自己疎外感		
IV. 自律性	$\beta = -.14$ c		I. 自己受容	$\beta = -.16$ b	
	$R^2 = .02$ c		SNS 利用頻度	$\beta = -.13$ c	
				$R^2 = .05$ b	
[従属変数] II. 心理的充足感			[従属変数] IV. 自己孤立感		
IV. 自律性	$\beta = -.19$ b		I. 自己受容	$\beta = -.31$ a	
SNS 利用頻度	$\beta = .18$ b			$R^2 = .10$ a	
	$R^2 = .08$ a				

N = 250

a : $p < .001$; b : $p < .01$; c : $p < .05$

ステップワイズ法 : 投入基準 $p < .05$, 除去基準 $p < .10$

β : 標準偏回帰係数 / R^2 : 決定係数

女子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機軸の探索 (VI)

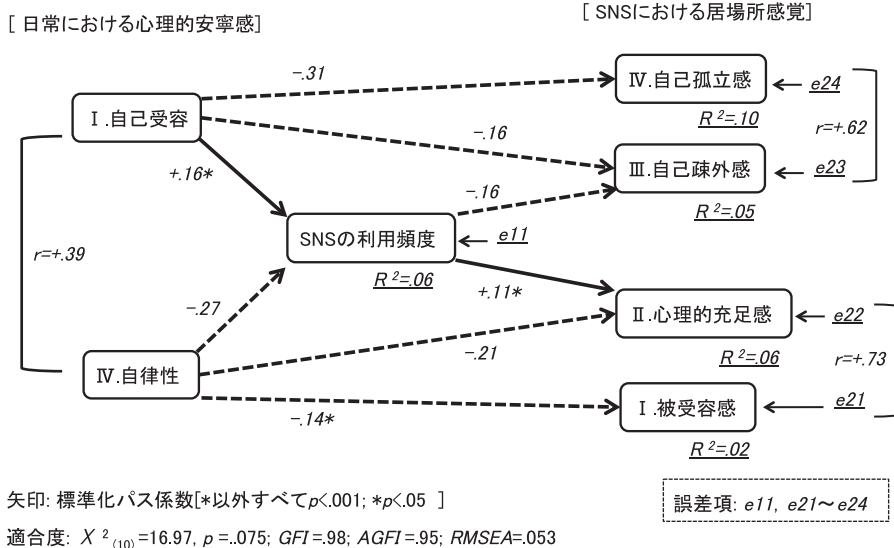


図1 日常の心理的安寧感, SNSの利用頻度, および SNS における居場所感覚との関係 (N=250) —観測変数の構造方程式による分析 (Amos 26.0.0, 最尤推定法)—

(2) 重回帰分析

次の2通りの分析を実施した。分析1では、心理的安寧感4下位尺度得点を説明変数とし、SNSの利用頻度を従属とする重回帰分析(ステップワイズ法:投入基準 $p < .05$, 除去基準 $p < .10$)を行った(表3上部)。分析2では、心理的安寧感4下位尺度得点とSNSの利用頻度を説明変数とし、居場所感覚4得点それぞれを従属変数とした分析を試みた(表3下部)。

(3) 共分散構造分析

SNSにおける居場所感覚の規定因に関する因果分析を Amos 26.0.0 を用いて行った。前述した単純相関分析および重回帰分析で認められた関係に基づきモデルを作成し、観測変数の構造方程式(最尤推定法:豊田, 1998)の分析を試みた。修正指数を参照しながらパスの設定を変え、モデル適合度を改善し、最終モデルを得た(図1)。確認された有意な影響経路は、先の一連の重回帰分析で認められた傾向と同じであった。

a) 日常における「自己受容」が SNS 世界での「自己疎外感」と「自己孤立感」を抑制する影響経路, b) 日常における「自律性」が SNS 世界での「被受容感」と「心理的充足感」を抑制する影響経路が見られた。a) の経路は命題 A を支持し、逆に b) の経路は命題 B と一致する。また、SNS の頻度に注目すると、日常での「自己受容」が SNS の利用を促進し、「自律性」は SNS の利用を抑える。前者の影響経路は命題 A, 後者は命

題 B とそれぞれ対応している。興味深いことに、SNS の利用によって、SNS 世界での「心理的充足感」を高め、「自己疎外感」を抑える。この影響経路はともに命題 A と一致する。

IV. 考察

本研究は、対面世界での心理的安寧感と SNS 世界での居場所感覚との関係を検討するために、2つの対立命題を設け、女子大学生を実証的に検討した。本研究では、西田(2010)が Ryff (Ryff, 1989; Ryff & Keys, 1995) に基づいて作成した尺度を利用した。因子分析によると、「人生における目的」、「人格の成長」、および「自律性」は西田が得た側面に対応していた。さらに「自己受容」は西田の「環境制御力」や「人生における目的」を含んでいたが構成項目全体の意味から解釈した。したがって、本研究で抽出された4側面は、西田の4側面が再現されたといえ、西田の回答者が幅広い年齢の女性であることを踏まえると、この4側面は特定の年齢に限定されない心理的安寧感の側面と判断できる。

次に本研究で抽出できなかった2側面について考察しよう。「環境制御力」とは、複雑な周囲の環境を統制できるという有能感、「積極的な他者関係」とは、暖かく信頼できる他者関係を構築しているという感覚をそれぞれ指す。西田(2000)による年齢段階別比較を見ると、

本研究の20歳前後の回答者に最も近い25-34歳群では「積極的な他者関係」が最も高く、「環境制御力」がかなり低かった。さらに、年齢段階が進展すると、前者は減少し、後者は高まっていた。つまり、年齢による変動が見られるこの2側面は年齢幅を限定すると現れにくいといえるが、このことは年齢幅を広げた研究で確認する必要があるといえる。

ところで、前研究(諸井ら, 2018)で作成したSNSにおける居場所感覚尺度では、5因子構造(「心理的充足感」「自己疎外感」, 「被受容感」, 「自己有用感」, 「戸惑い」)が得られたが、本研究では、4因子構造(「被受容感」, 「心理的充足感」, 「自己疎外感」, 「自己孤立感」)が現れた。つまり、前研究の「自己有用感」と「戸惑い」は消失し、前研究の「自己疎外感」から「自己孤立感」が分離した。前研究と本研究では同質のサンプルであるが、次の2点が異なる。a) 実施時期(前研究: 2013年・2015年・2017年春実施; 本研究: 2019年春実施), b) 回答者数(前研究: 563名; 本研究: 250名)。

b) については、データ数と得られた因子構造の頑健さの問題となる。a) については、先述したように、スマートフォンの普及やSNSの利用が増大していることと対応している(総務省, 2020)。つまり、SNS世界が特殊な世界でなく、日常世界と重層的に経験されることにより、居場所感覚の構造も変化したと推察できる。しかし、SNS世界といっても揭示された情報採取が中心となるRead-Only型世界と、自他の何らかのコミュニケーションが中心となる相互作用型世界に大別できる。しかし、前研究と本研究ともに、このような区別をして設問を構成していない。したがって、今後は、SNS世界が分化していることを踏まえて居場所感覚を探っていくべきといえよう。

次に、対面世界での心理的安寧感とSNS世界での居場所感覚との関係に関する本研究の主目的について考察しよう。ここでは、SNSにおける居場所感覚の規定因を明確にするために行った共分散構造分析(観測変数の構造方程式)の結果を中心に述べる。次の有意な影響経路が得られた。a) 日常における「自己受容」がSNS世界での「自己疎外感」と「自己孤立感」を抑制する影響経路(命題Aと一致)、b) 日常における「自律性」がSNS世界での「被受容感」と「心理的充足感」を抑制する影響経路が見られた(命題Bと一致)。また、SNSの利用について次の2つの有意な影響経路も現れた。c) 日常での「自己受容」がSNSの利用を促進し(命題A

と一致)、「自律性」はSNSの利用を抑える(命題Bと一致)。d) SNSの利用は、SNS世界での「心理的充足感」を高め、「自己疎外感」を抑える(命題Aと一致)。

前研究(諸井ら, 2018)でも命題Aと命題Bに対応する影響の両側面が認められているが、本研究でも対面生活で得られた心理的安寧感とSNS世界で醸成された居場所感覚との間に対立的な関連が予想通り得られた。「自己受容⇒自己孤立感」, 「自己受容⇒自己疎外感」, さらに「自己受容⇒SNSの利用頻度⇒自己疎外感」という有意な影響経路は、日常生活で自分自身を受容している者がSNS世界で肯定的な居場所感覚を得やすいことを意味し、命題Aを支持している。他方、「自律性⇒心理的充足感」, 「自律性⇒被受容感」, さらに「自律性⇒SNSの利用頻度⇒心理的充足感」という有意な影響経路のほうは、日常で自分自身の基準に従って行動を統制する者は、SNSに肯定的な居場所感覚を醸成できないことを表しており、命題Bを支持した。

このように、本研究では、諸井ら(2018)と同様に、SNS利用に関する対立する傾向が同時に現れた。ところで、SNSの特徴は一律ではなく、a) 情報探索, b) 匿名的相互作用, c) 顕名的相互作用, d) 画像呈示, e) 閲覧制限(会員制や特定の相手に限定)など様々である。さらに、同一のツールでも匿名・顕名や閲覧制限の選択ができ、本来はメッセージ中心のツールであるはずなのに、画像呈示が可能なものもある。

つまり、特定のSNSツールをどのように利用するかについては本人が選択できるが、本研究では、回答者が具体的にSNSツールをどのように利用しているかという実態に関する設問は設けていなかった。今後は、このような利用実態を整理して日常での心理的安寧感とSNSにおける居場所感覚の間の媒介変数として設定して、対立的な命題Aと命題Bが現れる条件を精緻に検討すべきであろう。

〈付記〉

(1) 本報告は、第2著者の木ノ下晴葉が第1著者の下で卒業研究(人間生活学科2019年度卒業論文)のために立案・実施した研究に基づいている。第1著者が再分析を行った。

(2) データの統計的解析にあたって、IBM SPSS Statistics version 26.0.0.1 for Windows と IBM SPSS Amos version 26.0.0 for Windows を利用した。

V. 引用文献

加藤千枝 2013 「SNS疲れ」に繋がるネガティブ経

女子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機制的探索 (VI)

- 験の実態－高校生15名への面接結果に基づいて－ 社会情報学, **2(1)**, 31-43.
- 木村 敦・河合萌華・中嶋 凌・山本真菜・岡 隆 2018 高校生における認知熟慮性と SNS 利用リスクの楽観視との関連 日本教育工学会論文誌, **42**, 25-28.
- 久保昌平・坂田桐子・清水裕士 2015 青年におけるアイデンティティ確立と SNS の利用および依存との因果関係の検討 人間科学研究 (広島大学総合科学研究科), **10**, 9-16.
- 諸井克英 2000 情報通信の病理－親和コミュニケーションの発展－ 廣井 脩・船津 衛 (編) 『情報通信と社会心理－シリーズ情報環境と社会心理6－』北樹出版 155-172 頁
- 諸井克英 2004 携帯電話－孤独の迷宮と「親指コミュニケーション」－ AERA Mook (96) 『コミュニケーション学がわかる』134-137.
- 諸井克英・岸沙耶香・米澤美幸・永野遥果 2018 女子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機制的探索 (IV)－SNS (social networking service) 世界における居場所感覚－ 総合文化研究所紀要 (同志社女子大学), **35**, 183-195.
- 仲嶺 真・田中伸之輔・上條菜美子 2019 高校生が SNS で知り合った異性と対面で会うまでのやりとり 社会情報学, **8(2)**, 159-168.
- 中尾陽子 2017 「SNS 疲れ」につながるネガティブ経験の実態－大学生への面接結果および高校生の実態との比較検討から－ 人間関係研究 (南山大学), **16**, 53-68.
- 中山満子 2018 高校生の友人関係と SNS 利用に伴うネガティブ経験 科学・技術研究, **7(2)**, 127-132.
- 西田裕紀子 2000 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究 教育心理学研究, **48**, 433-443.
- 岡本卓也 2017 SNS ストレス尺度の作成と SNS 利用動機の違いによる SNS ストレス 信州大学人文科学論集, **4**, 113-131.
- 岡村季光・多根井重晴 2020 青年期後期の SNS アカウント保有数と自己隠蔽傾向の関連 奈良学園大学紀要, **12**, 23-28.
- Ryff, C. D. 1989 Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 1069-1081.
- Ryff, C. D., & Keys, C. L. 1995 The structure of psychological well-being revisited. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 719-727.
- 総務省 2020 『令和元年通信利用動向調査の結果』 [https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01tsushin_02_02000148.html] 2020年8月31日閲覧
(2020年10月1日受理)
(2020年10月29日採択)

付表 1 心理的安寧感尺度における残余項目

well_a_1	私は、これからも色々な面で成長し続けたい。
well_a_6	私は、温かく信頼できる友人関係を築いている。
well_b_2	私は、状況をよりよくするために、まわりに柔軟に対応することができる。
well_b_3	私にとって、まわりの人たちとの親密な関係を維持することは面倒だ。
well_b_4	私には、これ以上の新しい経験や知識は必要ない。
well_b_9	私は、これまでに、あまり信頼できる人間関係を築いてこなかった。
well_c_1	これ以上、私自身を高めることはできない。
well_c_5	私は、自分のまわりで起こった問題に、柔軟に対応することができる。
well_c_6	私は、誰かといくと愛情や親密さを感じることが多い。
well_d_1	私は、今とは異なる自分になりたいと思う。
well_d_2	私の今の立場は、様々な状況に折り合いをつけながら、自分自身で作り上げたものである。
well_d_3	私は、まわりの人たちに強く共感できる。
well_d_6	私は、自分の行動は自分自身で決める。
well_d_9	私自身の時間をまわりの人たちと共有できると、うれしくなる。
well_e_1	私の能力は、もう限界だ。
well_e_2	私にとって、人生は退屈で興味が湧かない。
well_e_7	私は、習慣に囚われず、自分自身の考えに基づいて行動している。

付表 2-a SNS の利用頻度と日常生活における心理的安寧感および SNS における居場所感覚との関係ーピアソン相関値ー

[SNS の利用頻度]		[SNS の利用頻度]	
[日常生活における心理的安寧感]		[SNS における居場所感覚]	
I. 自己受容	.05	I. 被受容感	.13 c
II. 人生における目的	-.09	II. 心理的充足感	.22 a
III. 人格的成長	-.06	III. 自己疎外感	-.14 b
IV. 自律性	-.21 a	IV. 自己孤立感	.03

N = 250

a: $p < .001$; b: $p < .01$; c: $p < .05$

付表 2-b 心理的安寧感と SNS における居場所感覚との関係ーピアソン相関値ー

[日常生活における心理的安寧感]	[SNS における居場所感覚]			
	I. 被受容感	II. 心理的充足感	III. 自己疎外感	IV. 自己孤立感
I. 自己受容	.03	.02	-.17 b	-.31
II. 人生における目的	.01	-.15 c	-.13 c	-.14 c
III. 人格的成長	.06	-.03	-.05	-.06
IV. 自律性	-.14 c	-.23 a	-.11	-.20 a

N = 250

a: $p < .001$; b: $p < .01$; c: $p < .05$